

平成 22 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520007
 研究課題名（和文） メディアの哲学の構築 画像の役割の検討を中心として
 研究課題名（英文） Philosophical Studies on Media
 -Concerning the Role of Pictures-
 研究代表者
 小熊 正久（OGUMA MASAHI SA）
 山形大学・人文学部・教授
 研究者番号：30133911

研究成果の概要（和文）：参加者の個人研究および討論を通して、社会システム論、現象学、技術哲学の観点からのメディアと画像の本質の研究、分析哲学的観点からのフィクション論と画像論、映画の倫理コードおよび有害情報規制という倫理的観点からの画像メディアの研究を行い、進展がみられた。各自の成果は著書、論文、口頭発表を通して公表されるとともに、全員の成果は冊子体の報告書によってまとめられている。

研究成果の概要（英文）：

Our society made following studies and published results of them in books, dissertations of members, and in a research paper of our society (2010. march). 1. Studies on the essence of Media and Pictures from the view-points of Theory of Social Systems, Phenomenological and Technological Studies. 2. Studies on Fictions and Pictures by the method of Analytical Philosophy. 3. Studies on Ethics of regulation of injurious pictures in Media and Studies on ethical codes of film.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・ 哲学・倫理学

キーワード：メディア，画像，情報，倫理， コミュニケーション，技術

1. 研究開始当初の背景

現代の情報メディア(媒体)の発達、意思疎通の活性化、コミュニティの形成といったポジティブな面をもつとともに、個人情報漏洩、犯罪の媒体、諸画像の悪影響、暴力、現実感の喪失といったネガティブな面も合わせも

つ。そのような中で、情報メディアとは何か、メディアの役割と危険はどこに存するかといった原理的考察はなされておらず、とくにその状況は、画像メディアにかんして著しい。そこで、本研究グループは、メンバー各自の研究方法に従って、画像メディアを中心とし

たメディアの本質、画像メディアの役割、画像メディアの諸問題についての研究を行った。

2. 研究の目的

メディアおよび画像メディアについて、以下の点を明確化することが目指された。

- (1) メディアの基礎理論（メディアの本質）
- (2) 画像メディアの役割
- (3) 画像メディアと倫理の関連

3. 研究の方法

以下のような研究方法によって、各自が研究を進めるとともに、研究会においてその成果をもちよって討論を行い、共同で主題に取り組んだ。

- (1) 現象学
- (2) 社会システム論
- (3) 分析哲学
- (4) 技術哲学
- (5) 倫理的・教育的考察

また、画像メディアに関連して、外部の講師を招いた研究会をおこない、討論を充実したものとした。さらに以下の講演会ならびに討論を行ったことを付記しておく。

講演者：クラウス・ヘルト教授 (Prof. em. Dr. Klaus Held)。題目："Cézannes Bilder als Revolution der Malerei" (絵画芸術の革命としてのセザンヌの絵画)。平成 21 年 11 月 5 日 (於山形大学)

4. 研究成果

(1) メディアの基礎理論（メディアの本質）について。

大黒は、社会のリアリティとメディアの問題を、コミュニケーション、とりわけ身体的コミュニケーション、身体が産み出すリアリティを手がかりとして考察した。

小熊は、現象学とも関連の深いルーマンおよびバレーラのシステム論的思想を参照しつつ、意味を介する志向性や生物の環境との関連における活動を、差異や情報という観点から考察した。

清塚は、分析哲学的伝統にたつて、文学作品や画像にも関連する「フィクション」の概念を考察し、そのさいとくに「ごっこ遊びの

理論」を重要な手がかりとした（著作『フィクションとは何か』など）。この研究は、この課題研究にとっては、情報の受容一般に関して問題となるヴァーチャル・リアリティないし虚構と現実の関連についての考察の一環とみなすことができる。

(2) 画像メディアの役割について

清塚は、絵画や写真などの画像の研究を継続して遂行しており、報告書冊子所収の論考にみられるように、色のついたカンヴァスとともにそこに描かれた風景や人物を見ると、画像の存在の根本にかかわる問題を分析哲学の立場から考察した。この考察は、画像メディア全体にかかわるものであり、事柄の上で現象学的考察とも関連してくる。そのほか、報道写真のリアリティの問題にも取り組んだ。

田口は、フッサールの「像意識」の分析にみられる、画像現象の三つの契機（物理的像、像客体、像主題）に言及し、それが像意識においては、不可分であることを指摘し、像の媒体性や媒体機能に注目し、そこから、フィールドラーを参考としながら芸術作品について考察した（報告書冊子）。

小熊は、メルロ＝ポンティによる知覚的志向性の構造の分析をふまえて、映画の知覚の分析を行ったヴィヴィアン・ソプチャークの論考を参照しながら、技術に媒介された映画の知覚を考察した。明らかになったことは、映画の技術は複合的なものであり、（カメラと映写機を取り上げれば）それぞれの装置による媒介が、装置と一体になって対象とかわる「一体的様態」と装置による媒介を問題にする「解釈的様態」をとるということである。そうした両義性により映画の知覚とともに映画と対話的に関わることが可能になる。また、映画における一体的様態において

は、他者の知覚を共有するという特徴が存する(報告書冊子)。

大黒は、フレームないしラーメン(額縁)と「現場不在の現実性」というルーマンの概念を参照しながら、「映像コミュニケーション」における虚構性と現実性との、また、知覚とコミュニケーションとの両義性や、コミュニケーションの隠蔽について考察した。

さらに、バルトの「第三の意味」(コードなきメッセージ)に映像コミュニケーションの独自性を追究した。(『謎としての"現代"』)。

直江は、技術をメディアとして把握する際の要点を提示した(報告書冊子)。また、美学をモデルとした像の受容の構造と、現代科学におけるその意義の両面から研究を進めた。

(3)画像メディアと倫理について。

松川は、画像メディアの倫理に関して、有害情報規制に対する倫理的根拠の問題に取り組んだ。これは20世紀前半から映画の倫理コードに関して論じられてきた問題でもあるが、1930年代のイギリス映画における倫理思想の基礎資料の調査(本研究による海外出張)ならびに倫理的考察を行った。また、テレビにおける暴力描写についての基本文献の紹介および考察を行った。

平田は、カントの感性論を参照しつつ、画像メディアの虚構と現実の問題に取り組んだ(報告書冊子)。

(「報告書冊子」については、「5. 主な発表論文等」の〔その他〕を参照されたい。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計20件)

田口茂、「現実的なものの斥けがたさ
フッサールの明証概念にもとづく『経
験』の再定義」、『フッサール研究』、
第8号、pp.15-26、2010、査読無、

松川俊夫、「メディア暴力の倫理学()
- 公的機関の報告」、『山形短期大学
紀要』、42集、pp.103-114、2010、査
読有

直江清隆、「受容と創造(2)」、『思
索』、42号、pp.1-28、2009、査読無

松川俊夫、「メディア暴力の倫理学()
英国映画検閲委員会の倫理(1)」
『山形短期大学紀要』、41集、
pp.135-146、2009、査読有

田口茂、「視ることの倫理 フッ
サールにおける『理性』概念の再定義
」、『現代思想』、Vol. 37-16: 「総
特集フッサール」、pp. 36-50、2009、査
読無

清塚邦彦、「虚構論」飯田隆ほか編『岩
波講座哲学 03 言語/思考の哲学』、
pp.171-188、2009.2、査読無

小熊正久、「メルロ=ポンティとバレー
ラ 運動的志向性と身体を中心に
」、山形大学紀要(人文科学)、16巻
4号、pp.1-28、2009.2、査読有

大黒岳彦、「システムとしての情報社会」
『明治大学社会科学研究所紀要』、第47
巻第1号、pp.103-114、2008、査読有

直江清隆、「宇宙技術の価値」、伊藤邦
武編『科学/技術の哲学』(岩波講座哲
学09)、p.176-198、2008.9、査読無

清塚邦彦、「ウォルトンの写真論をめぐ
って ii 演じることと見ること」、『新
記号論叢書5 写真、その語りにくさを
超えて』(日本記号学会)、61-67頁、
2008.5、査読有

Kiyotaka Naoe, Design Culture and
Acceptable Risk, Pieter E. Vermaas,
Peter Kroes, Andrew Light, Steven A.
Moore(ed.), Designing: from
philosophy to ethics, from engineering

to architecture, Springer, p.119,
2008. 1. 査読有

松川俊夫、「倫理綱領と自由を制限する
諸原則」『山形短期大学紀要』、40集、
pp.113-122、2008. 査読有

平田俊博、「共生の地球平和システムの
構想」、地球システム・倫理学会編『地
球システム・倫理学会会報』、第2号、
79-85頁、2007、査読無

直江清隆、「技術の哲学と倫理という課
題」、『モラリア』、第14号、pp.1~7、
2007.10. 査読無

清塚邦彦、「写真とメディア：K・L・
ウォルトンの写真論を手がかりに」、『東
北哲学会年報』、23巻、pp.81-92、2007.5.、
査読有

小熊正久、「フッサーとフルッサー
画像とテクノ画像」、東北哲学会年報、
No23、pp.73-80、2007.5. 査読有

大黒岳彦、「映像とコミュニケーション
ルーマンとバルトの議論を手掛かり
にしつつ」pp.93-103 『東北哲学会年
報』、No.23、2007.5. 査読有

大黒岳彦、「「メディアの一般理論」の
展開 「映像」のコミュニケーション論
的考察」、『明治大学社会科学研究所
紀要』、第45巻第2号、pp.96-105、
2007.3. 査読有

〔学会発表〕(計9件)

平田俊博、「カントの感性概念の諸相
こころの在り処」、日本カント協会、
2009年11月21日、立正大学。

小熊正久、「映画を見るとはどのよう
なことか メルロ＝ポンティを手がかりと
して」、2009年8月25日、「メディア
の哲学構築」研究会、山形大学人文学部。

清塚邦彦、「分析美学の現在」、哲学若
手研究者フォーラム 2009年度テーマレ
クチャー、2009年7月17日、国立オリ

ンピック記念青少年総合センター。

清塚邦彦、「虚構の美がせまってくる
芸術の analysis、創作の dynamics」、
早稲田大学現代文学会 2008年度講演会、
2009年02月07日、早稲田大学。

松川俊夫、「医学倫理的視点からの「テ
レビ番組における暴力描写」、日本医学哲
学・倫理学会、2008年10月26日、北海
道大学。

小熊正久、「メルロ＝ポンティとバレー
ラ」、2008年7月19日、現象学を語る
会 於東北大学文学部。

松川俊夫、「Ethics” of Applied Ethics
or “Applied” of Applied Ethics
応用倫理学の基底となる倫理学とは?」、
東北哲学会第57回大会、2007年10月20
日、東北大学。

〔図書〕(計8件)

田口茂、法政大学出版局、『フッサー
における 原自我 の問題』、2010、380
頁。

清塚邦彦、勁草書房、『フィクションの
哲学』、2009、270頁。

大黒岳彦、春秋社、『謎としての“現代”
- 情報社会時代の哲学入門』 2007、371
頁。

松川俊夫(共編、共著)、丸善、『応用
倫理学事典』、2007. pp700-728. 編集、う
ち6頁執筆。

〔その他〕

冊子による本研究の報告書『メディアの哲学
の構築 研究成果報告書』所収の7論文は、
「ゆうキャンバスリポジトリ」にも搭載され
ており、以下のwebページで閲覧可能であ
る。論文名とアドレスを記す。

大黒岳彦：「対話」篇『パイドロス』

における メディア の問題」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6922>

清塚邦彦：「絵を見る経験について R・ウォルハイムとK・L・ウォルトンの論争を手がかりに

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6923>

田口茂：「画像の媒体性

その現象学的分析の試み(フッサールとフィードラーに即して)」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6924>

小熊正久：「映画の知覚と映画の技術

現象学的観点から」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6925>

直江清隆：「技術という媒体」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6926>

平田俊博：「カントの感性論とバーチャル・リアリティ」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6927>

松川俊夫：「英国及び米国に於ける映画規制の倫理」

<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6928>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小熊 正久 (OGUMA MASAHISA)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：30133911

(2) 研究分担者

平田 俊博 (HIRATA TOSHIHIRO)

山形大学・大学院教育実践研究科・教授

研究者番号：60113974

松川 俊夫 (MATSUKAWA TOSHIO)

山形短期大学・人間福祉学科・准教授

研究者番号：40341739

直江 清隆 (NAOE KIYOTAKA)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30312169

清塚 邦彦 (KIYOZUKA KUNIHICO)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：40292396

大黒 岳彦 (DAIKOKU TAKEHIKO)

明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30369441

田口 茂 (TAGUTI SIGERU)